Osaka Shoin Women's University Repository

母子保健領域における心理職の役割に関するインタビュー調査

短期大学部　キャリアデザイン学科　瀬々倉玉奈

【研究の背景と目的】

親子をめぐる環境が大きく変化してきたことに伴い、母子保健事業の目的も「子育ち支援」から「子育ち・子育て支援」へと変遷した。これによって、母子保健事業を担う保健センターにおいて心理職に求められる役割も変化してきている。ところが、厚生労働省が提示した「健やか親子 21」の開始年度（2001 年度）に実施した全国調査（瀬々倉．2002・2010）（以下、「2001 年度調査」）では、心理職が事業に関わっている保健センターは限られており、心理職の役割モデルや援助モデルが確立されておらず、特に臨床心理学を学んだ若手の心理職が専門性の活用について困っていることが明らかとなった。一方、母子保健事業実施の中心的な役割を担う保健師は、心理職と共に仕事をする過程で、心理職の重要性や意義を徐々に理解していくことも明らかにされた。

そこで、「健やか親子 21」の取り組みが始まって 10 年が経過した現在、上記の諸課題がどの程度解決されているのかをインタビュー調査によって事例的に明らかにしようと試みた。

また、本調査は、2001 年度調査の再調査を実施する上での予備調査でもある。

【研究方法】

鳥取県 X 市保健センターは、一般的には 3 才児健康診査（以下、「健診」）で終了する乳幼児健康診査に加えて、現在その必要性が訴えられ始めている 5 歳児への対応として「5 歳児発達相談」を実施しているほか、家庭訪問型の支援である「養育支援訪問事業」の担当者として、ほぼ常勤に近い形態で心理職を雇用しているなど、先駆的な試みを行っている。

そこで、母子保健事業を担当する保健師 1 名と心理職 1 名に対し、主に心理職の役割に関して、対話形式の半構造化面接（インタビュー調査）を各々 1 時間ずつ行い、録音音声を逐語録化したものを分析した。

インタビューの前に、X 市の先駆的な試みである 5 歳児発達相談とその後の会議にも同席し、その他の子育て支援施設も見学するなど、できうる限り X 市の子育て環境を理解した上で、インタビューに臨んだ。

【まとめ】

まず、調査結果から、以下の 3 点が明らかになった。①子育ち・子育て支援という新しい枠組みにおける母子保健領域は、人手不足に伴う問題、他機関との連携に関する問題、心理職の役割に関する問題など、保健師・心理職いずれにとっても課題が山積している一方で、多職種のコラボレートによる援助が可能であること、親子に最早期から関われること、家庭訪問が可能であることなど、心理職のみで行う援助とは異なる可能性を秘めている。②母子保健領域における心理職は、保健師からの期待が高く、肯定的なイメージをもたれてはいるものの、その役割モデルや保健師等とのコラボレートによる援助モデルが具体的な形で構築されていない。③以上の 2 点から、心理職は自らの専門性の活用について、様々な困難を感じており、心理職の役割モデルと多職種のコラボレートによる援助モデルの構築が急がれる。これら 3 点の内容にともなって、雇用形態の問題にも言及した。

次に、X 市保健センターの心理職と、インタビュアー（筆者）との対話を通して、母子保健領域ならではの心理アセスメントとアプローチのあり方について、①援助対象のアセスメント、②援助環境のアセスメント（瀬々倉．2004）という観点を用いて考察した。

また、先の 2001 年度の全国調査結果と今回のインタビュー調査結果とを比較検討し、概ね一致することを確認した。

さらに、X 市保健センターと、筆者の知るある時期の A 保健センターとを母子保健事業のシステム面から比較検討し、個々人の努力だけでは補えきれないシステム面からの整備の必要性についても検討した。

【文献】

瀬々倉玉奈（2011）母子保健領域における心理職の役割に関する事例研究－鳥取県 X 市保健センターでのインタビュー調査－．神戸大学大学院人間発達環境学研究科『研究紀要』．第 5 巻 1 号．Pp. 53-66

瀬々倉玉奈（2010）母子保健領域における心理職の役割に関する全国調査．大阪樟蔭女子大学人間科学研究紀要．第 9 号．大阪樟蔭女子大学学術研究会．Pp. 247-260

瀬々倉玉奈（2004）「子育て不安」に関わる三者の「現実」－保健センターにおける「子育ち・子育て支援」現場から－．現代のエスプリ第 449 号．至文堂．Pp. 89-99